『赤い鳥』第二巻・第三巻の綴方

――『赤い鳥』の綴方に関する研究 (二)――

長谷川　孝士

一　『赤い鳥』第二巻の綴方

『赤い鳥』は大正八年に入って第二巻となる。第二巻は同年一月から六月までの六号であるが、一月号・一月特別号から飛んで三月号となる。そして、同年七月号から十二月号までが第三巻である。

一月号では、「今月も大へんいゝのが集りました。私は選をしながら愉快でたまりません。」と言い、二編を特賞にしている。次の一月特別号では「今月は特に作文欄を八ページにしました。今月も特賞が二つありました。」と言い、さらに三月号でも「だん〳〵いゝのばかり集つて来るので、作文欄は八頁では狭くなつて来ました。」と言い、以下「今月もいゝのが沢山集りました。」(四月号)、「最後に、毎月諸君から送つて来る作文の数が次第〳〵にふえて行つて、今では三四ケ月も前の作文が漸く今月載るといふやうな有様になつてゐます。待ち遠しいでせうが、ペイジ数をふやすまで、暫く我慢してゐて下さい。」(五月号)のように、次第に応募作品の量がふえ質も高くなってきたことを物語っている。

第二巻で特に注目すべき入選作品としては、二編をあげることができる。

その一つは、五月号に特賞入選した「ふくろとかへる」である。

ふくろとかへる

広島県芦品郡新市小学校尋常一　高田英之助

ぼくのうちには　ふくろをかつてあります。ふくろはかへるをたべます。かへるをとるのは、めんだふですけれども、やらねばしにますから、とつてやります。かへるはよくあみのやぶれめからとびだします。にいさんが、おほきな〳〵かへるをとつてこられますと、ふくろはめをまるくして、キヨロ〳〵してゐました。そのかへるを入れてやると、パタ〳〵とはねをひろげました。かへるはふくろのうしろにちひさくなつてゐましたので、ふくろはまたパタ〳〵とはゞたきをしました。こんどはかへるのみがらにふくろのながいつめがずぶッとたちました。ふくろがそれをがぶッと、くちにいれてかむと、かへるのみがらからダラ〳〵とちがながれました。そしてぼくらがみてゐると、ふくろはかくれてたべました。

この号の選評「綴方をえらんで」のなかで鈴木三重吉は、「今月は私を驚かした作文が一つありました。それは高田君の『ふくろとかへる』です。高田君はまだ尋常一年生で片仮名しか書けない人で

すが、それにも拘らず、あれだけの文章を書いたのですから驚きます。教へ方さへよければ、一字も漢字を知らないでも、こんないゝ文章が書けるといふ、いゝ証拠になると思ひます。」と絶賛しているのである。この文面でわかるように、作者は片仮名で書いているのであるが、誌面では平仮名に改め、漢字も一字も知らないとあるが、誌面では「入れてやる」のところに漢字が一字用いられている。

この高田英之助少年は、その後「魚とり」（大正十年十一月号）、「しやせいうた」「夕の小鳥」「葉」「夜雨」（いずれも大正十年十二月号）の綴方・童謡が入選している。

もう一つ注目すべき作品は、六月号入賞の「姉」である。この作者の瀬川宗吉君は一月特別号で「顔の傷」が一度入選している。もっとも、そのときは「もと『小さい時』といふ題だつたのですが、それでは題を見たゞけでは中にどんなことが書いてあるのか分りませんから、私が『顔の傷』といふのに直しました。」と三重吉の言うもので、「自分のことをよくこれだけ落着いて書けたものです。事実ありの儘を正直に少しも飾らずに書いたところがエライと思ひます。」と、三重吉にほめられた少年である。

姉

盛岡高等小学校二年生　瀬川宗吉

或冬のこと、巻堀で先生をしてゐた僕の姉さんが、突然帰つて来た。それは僕が丁度額の傷から繃帯をとつた頃であつた。額の傷がよくなつたら、姉さんのところへ連れてゆくといふ約束を姉さんとしたことを思ひ出して、これはきつと姉さんが僕を連れに来たんだと思つた。

「ねえ、姉さん、さうでせう。僕の迎へに来たんでせう」と姉さんに言ふと、

「いゝえ、宗ちやん、もう私はあちらへは行かないの」と姉さんが言つたので、僕は不思議でならなかつた。

「なぜもう行かないの」と聞いたら、姉さんは黙つて今度は叔母さんと話をした。

僕は仕方なしに外へ出て、近所の友達と橇を引いて遊んだが、どうも不思議でならない。そのうちに、橇の競争が始つたので、とう〳〵姉さんのことは忘れてしまつた。

遊びにあきて家に這入つたら、叔母さんと姉さんとが炬燵に向ひ合つてゐた。話をしたあとらしい。姉さんが炬燵の蒲団に俯伏してゐる。不思議だと思つて炬燵に這入ると、やがて姉さんの啜泣が聞えた。叔母さんは怒つたやうな声を出して二言三言時々いふ。その度に姉さんの啜泣がハツキリする。僕は何のことか分らない。姉さんのやうな大きい人が、なぜ泣くのだらう。僕はどうしたらいゝか分らないので、絵本を開いて見てゐた。しかし、姉さんのことが気になつて読む気になれない。いつまでも同じところばかり目で見てゐた。

次の日になつた。今度は叔母さんも泣声になつて話す。お祖母さんの死んだ時のことなどを話してゐる。その話が姉さんに関係あるらしい。姉さんも一緒に啜泣してゐる。その話の中に大阪の宗太郎さんの話もまじる。今度は姉さんのかけてゐた指輪のこと

で叔母さんが怒つた。姉さんは黙つて泣いてゐる。僕は何のことかさつぱり分らないが、何となく姉さんが気の毒になつた。悪いこともしないのに、なぜ、あゝ叱るんだらうと思つた。

こんな日が幾日も〳〵続いた。

そのうちに、或日、見なれぬ立派な袴をつけた人が来た。そして姉さんのことを言つてゐるらしかつた。叔母は唯宗太郎さんのことを幾度も話してゐた。そしてその人は失望したやうな顔をして帰つて行つた。

その後のことはどうであつたか分つてゐない。唯或日のこと、姉さんが箱のやうなものから手紙らしいものなどを沢山出して、竈のところで火に燃してゐた。紙屑買にやればいゝのにと思つて、「僕におくれ」と言つたら、その中から選りぬいて賞状のやうなものを僕にくれた。それには巻堀小学校とあつた。姉さんは御褒美の証書だと言つた。

それから叔母さんが巻堀に行つて、校長先生と相談して、姉さんは遂に学校の先生をやめることになつた。

その後、しばらくたつて姉さんは巻堀の高橋とかいふ人の家にお嫁に行くことになつた。

或日、学校から帰つて来ると、家が非常に混雑してゐた。

やがて夜になつた。座敷へゆく襖の間からチラと見ると、羽織袴の人達がズラリと並んでゐる。そして僕の机の傍に、姉さんが常よりも美しく髪を結うて、下の方を向いてゐる。膳がズラリと並んでゐる。渋谷のおしいさんがお給仕をしてゐる。僕は家があんまり混雑で、ゐどころがないので押入の中に這入つて弟とヒソ〳〵話してゐた。夜の十時頃、皆帰つてしまつてから、僕等二人はさん〳〵叱られた。初めは姉さんがゐないで寂しかつたが、だん〳〵慣れて来て何とも思はなくなつた。

翌年、姉さんの家へ行つた叔母さんが、「姉さんの家は大きい草家だ」と言つたので、僕は撃温泉の宿のやうかと思つた。夏の休みに姉さんの家へ遊びに行つた。成程、大きな家だが、温泉宿のやうに廊下も部屋もなかつた。畠は大きいと思つた。

姉さんも今は二人の子の母になつた。あとから姉さんの泣いたわけは段々わかつて来た。姉さんは初め宗太郎さんに行くのであつたが、姉さんは本当は今のところへ行きたかつたのだ。またお祖母さんが死ぬ時、「ぜひとも梅子は宗太郎さんのところへやつてくれ」と遺言して逝つたのださうだ。

宗太郎さんはもう大阪で家を持つてゐる。

今までの入選作は概して短いもので、これほどの長文が載ったのは初めてであり、その意味でこの「姉」は画期的な作品といえよう。

三重吉はこの号の「綴方をえらんで」において、「ずつと前に、『顔の疵』といふ綴方で特賞になつた瀬川君が、また『姉さんのお嫁に行つたこと』といふ長い綴方をよこしました。」と言っている。「姉さんのお嫁に行つたこと」というのが原題であったのを、前作の「小さい時」を三重吉が「顔の傷」と改めたように、このたびも「姉」と改めたのではないかと思われる。

三重吉は、この「姉」について、次のように評している。

姉さんがふいに帰つて来たことから、しまひにお嫁にゆくところまで、実にくはしくこまかく書きあらはされてゐます。たゞあんまり旨過ぎるので、瀬川君のために少し怖いやうな気がします。みなさんも瀬川君のやうに旨くなる必要は決してありません。又こんなのばかりがよい綴方でもありませんから、むやみにまねをしてはいけません。

なお、作品中の「撃温泉」は「繋温泉」の誤植であろう。

第二巻において、もう一つ注目に価することがある。それは、五月号（第二巻第五号）の「通信」欄に載った、次の投書である。

私共の図画の先生のお話に、尋常一年にゐられる先生のお子さんが、雀といふ課題で次のやうな作文を作られたさうです。「スゞメガ一ハトンデキマシタ。マタ一ハトンデキマシタ。スゞメガ一ハトンデユキマシタ。マタ一ハトンデユキマシタ。マタ一ハトンデユキマシタ。」受持の先生はこの作文を児童たちに読んで聞かして、みんなと共に大笑ひをされたさうです。こちらの先生のお家では皆さんがはッはとお笑ひになつたさうです。私はこの無邪気な、偽りのない表現に対して讃歎を禁じ得ません。すべての子供がこんな風に、自分の思つたこと見たことを、そのまゝ飾りなく書き現はすやうになつて欲しいと思ひます。さうなれば各人の真率な自己がどんなに活躍するでせう。

（東京青山師範学校内、松田英雄）

師範学校生のこの投書につづけて、記者が「鈴木先生もこれを読んで大変にお喜びになり、これが『赤い鳥』へ来たら特賞にする、そのつもりで何か御褒美を上げてくれと仰いました。先生の世界童話集の中、一番御得意な『湖水の鐘』を一冊お手元までお送りしますから、失礼でないやうな順序でそのお子さまにお上げ申して下さい。」と書いている。これが募集綴方の応募作品であるならば特賞にすると、三重吉が言ったというのである。三重吉の文章観・綴方観によくかなったものであった。

その翌々月号（第三巻第一号、大正八年七月）に、青山師範学校の「図画の先生」が次の稿を寄せている。

いつもより遅れて家に帰りますと、松田君からの小包が机の上に載つてをりました。開けて見ると鈴木先生の「魔女の踊」に手紙がそへてあります。それが案外にも、昨年青山師範の教壇で「子供の図画は、大人の描いた手本などに依つて描かせないで、子供の観て感じたことを、そのまゝ描かせるがいゝ」といふ話をしたついでに、私の子供の「雀」といふ綴方の話をしたのでしたが、それを松田君が「赤い鳥」に通信され、（記者曰く、五月号所載）それが鈴木先生のお目にとまつての御褒美であるといふことです。早速子供を呼んでその話をしますと、子供は意外らしく眼を円くしてをりましたが、本を渡しますと顔を赤くしながら自分の室に帰りました。喜んだのは、子供よりは寧ろ母親の方でした。実は、あの「雀」の綴方を発見したのは母親が最初でした。少し経つて子供の室に行つて見ますと、「魔女の踊」を、もう十

二三頁も読んでをります。「解るかい」と聞きますと、黙つてうなづいたまゝ読みつゞけてゐます。「子供の友や幼年画報はもう厭になつたから、何かもつといゝ本を取つてね」と母に頼んでゐたのは、ついこの間のことでした。私は保姆養成所の生徒たちから「お話の材料に何かよい本は」ときかれた時に、いつも「赤い鳥」をごらんなさいと申します。しかし私の子供にはまだ読ませませんでした。今はもうその時が来たと思ひますから、今月から「赤い鳥」をとることにきめました。（青山師範学校、赤津隆助）

二　『赤い鳥』第二巻当時の反響

第二巻の終わりごろ、つまり大正八年の五月号・六月号になると、右の「ふくろとかへる」「姉」のような作品や、「スゞメガ一ハ…」のような「通信」が寄せられ、しだいに鈴木三重吉の考えが理解されてくる。たとえば師範学校生の「すべての子供がこんな風に、自分の思つたこと見たことを、そのまゝ飾りなく書き現はすやうになつて欲しい」という発言など、まさに三重吉自身のことばといってよいほどである。

木内高音氏が「試みに『赤い鳥』創刊以前または、その初期における　他の児童雑誌の投書欄を見よ。（中略）おとなの文章の模倣に終始した　ひねッこびた　こまッしやくれたものにすぎなかつたかを再発見して、おどろきを新たにせずには、いられないであろう。夜明けには『鶏が東天紅となき』夕方には『夜のとばりがたれそめる』といつた式の表現に　みち〳〵ており、それに、また選者が圏点などをつけて　ほめているのだから、ぞッとする。」（角川文庫版『綴方読本』「あとがき」）と記しているような一般的傾向のなかで、三重吉の綴方観・文章観に対する共鳴や、掲載される入選作品に対する共感・支持の発言が誌面に多く見られるようになってくる。

その主なものを若干とりあげてみる。

○田舎の児童は都会の児童と違つて童話に出て来る言葉の多くを知らぬ。例へば王様、奴隷などゝいふ言葉さへ知らないのが多い。これは地方の小学教員の欠陥か、或は児童に常識のないためかそれは分らないが、兎に角「赤い鳥」に出て来る言葉を悉く解し得る児童は稀である。（後略）（千葉、吃郎子）（第一号）

これは綴方について述べたものではないが、地方の児童の語彙力の乏しさを言いながら、『赤い鳥』そのものの都会的な傾向を指摘するものである。

○或子供が作文に友達と遊んだことを書いて「△君と△君と△君と三人で……」と書いて、それを「△君と△君と△君と△君と四人で……」と直してゐました。三人としても四人としても、文章には何の関係もないことですが、ウソを書くまいとする心を有り難いものに思ひました。（岡山市、児玉角郎）（第三号）

○私は「赤い鳥」の発展を見て衷心嬉んでをります。殊に作文欄に於て一新面目をお開きになつてゐることを愉快に思ひます。私もやがて教鞭を取るやうになりましたら、先生のお趣旨の許に児童を導いて行くつもりです。（青山師範学校、楓葉生）（第三号）

○児童の綴方については、これまでにも随分多くの所謂教育学者や実際教育家の手で研究されて来た。しかしそれらの人々は綴方の

本質を知らない。児童心理の実際を知らない。だからそれ等の研究はいつも空虚なものになつてしまふ。ところで、子供は自分が実際に把握してゐる事柄ならば、大抵のことは文字に綴り出す才能を持つてゐる。よし上手には書けないにしても、兎に角苦痛なしに愉快に書き現し得る。ところが実際はさういふ自由を子供は与へられてゐない。やたらに小むづかしい、子供の生活とは何等の交渉もない、無味乾燥な課題を課せられる。そして無理やりに課題の搾木に掛けられていやをうなしに物を書かされる。その結果は大人の真似をすることの上手な子供が作文の上手として褒められることになる。こんな滑稽な同時にこんな残酷なことがあらうか。唯仕合なことに、「赤い鳥」誌上で発表される子供の綴方のみはこの呪ふべき僻見を見事に破り捨てゝ、子供の自由な才能を恣に発揮させてゐる。私はその点を何よりも「赤い鳥」の権威だと信じてゐる。この上は出来るだけこの方面に誌面を割いて、なるべく長い文章の奨励に努められんことを祈る。なぜと言つて、指導さへよければ、八九十行の作文は容易に子供の頭から生れ得ると信ずるからである。私はこの信念の下にいつも長い綴方を生徒に書かせることを実行してゐる。（群馬県滝川小学校、大沢雅休）（第三号）

この大沢雅休氏の通信は、いわゆる課題主義を否定して「子供の自由な才能を恣に発揮させてゐる」点が『赤い鳥』の権威であると賛意を表し、かつ、もっと長文を奨励するように、自己の「信念」にもとづいて発言したものである。

熱心な支持者の一人である大沢氏は、さらに第五号にも、次のような通信を寄せている。

○私の受持の尋常六年の男生徒四十名のうちに、下の学年のときから、低能児と見做され自身でも正に低能だと思つてゐる生徒が四五名（余りに多数ですが）をります。その中で「赤い鳥」の影響によつて、自発的に急によく出来るやうになつたのが一人あります。その子は「赤い鳥」を読むために、読方の力と作文の力とが著しく増して来ました。これは私のみでなく同僚たちがすべて認めて愕いてゐます。特に綴方は、「赤い鳥」の綴方の自由な取材に刺戟されて、すべての事象に細かい注意を払ふやうになりましたので、火事を見ても競馬を見ても麦踏みに行つても、すぐそれを材料に自由なよい綴方を作つてまゐります。私は、これによつてどんな低能な児童でも刺戟の方法さへよければ、多少の進歩は見られ得ることを知つて、今更非常に恥かしく感じました。

このように、『赤い鳥』の入選綴方の「自由な取材に刺戟されて」一人の遅れている子どもが「すべての事象に細かい注意を払ふやうに」なるとともに、「よい綴方」が書けるようになったと、その影響の大きさをたたえ、そのあと、いっそう厳密に優秀な作品を選んで「児童文集」を発行してほしいという希望を述べている。それは課外読本としても綴方の手本としても有益であり、父兄や教育者にとっても「生動してゐる児童心理を解剖するのに大変よい参考書」ともなるであろうと、期待するところを書いている。

そのほか、『赤い鳥』の作文の純清と自由とを愉快に思ひます。

子供は真実な創作家です。すべてについて偽りのない彼等は、同時にあらゆるものに向つて自由を求めてをります。私も生徒の作文をお送り申しました。」（埼玉県大和田町第一小学校、金子喜一郎）、「児童達に雨の日には、『赤い鳥』の童話を、作文の時には入選の綴方を、読み聞かせ、或は直接に読ませて奨励致居候。」（宮崎県佐土原小学校、井上呉水（ともに第六号）のような投書が見られる。

当の児童たちの投書もいくつか載せられている。中には、「私は十五ですが、中学三年生では作文の投書は出来ませんか。十六でも二年生なら出来るのに。もし駄目なら、三年以上の欄も設けて下さい。」「私は高女の一年生ですが投書が出来ますか。お伺ひいたします。」（ともに一月特別号）のような質問があり、それに「随意に投書して下さつて差支ありません。」という記者の回答が載ったりしている。

あるいは、「（前略）しまひのところに、綴方が本当に上手かどうかといふことは、『赤い鳥』に投書して見るとわかると書いてあつたので、ためしに出して見ますと、それが特別号に特賞で出ました。そのときのうれしかつたことゝ言つたらありませんでした。」（第四号）と、入賞の喜びを書いたものや、「僕はいくども作文を投書しましたが、一度ものつたことがありません。いつも没書ばかりです。」（一月特別号）とか、「鈴木先生、私は十二月に投書しましたが没書になつたので、一時は落たんしましたが、今度また投書しましたから、ぜひ賞にして下さい。本当にすゞき先生ほどよいお方はありません。」と書いて、記者に「これから、そんなおベッかをつかふと、どんなよい綴方でも没書にしますよ。」とたしなめられる者などが見られる。

三　「赤い鳥」第三巻にみられる三重吉の綴方論

第三巻第一号（大正八年七月）の選評欄で鈴木三重吉は、「綴方といふものは決して歴史や理科や修身のお話を書くものではありません。何でも自分の思つてゐることあつたこと見たこと、人に言ひたいことを口で話す代りに、自由に文字で綴るための練習ですから、たゞ歴史や理科や修身のことばかり上手に書けるだけでは駄目です。」といましめている。投稿作品にそうした借り物の概念的な文章があとを絶たないという状態がつづいていることを表している。

三重吉は、子どもたちの応募作品に多く接することをとおして、綴方指導上の問題点を実感するようになり、それに加えて現場教師の質問や感想・意見が寄せられてくるにともなって、いっそう明確にその問題点をつかむようになった。そこから、三重吉の綴方理論が形成されていくことになる。

その最初の問題点は、指導上の「組織的法則」の措定の必要性とともに、その根幹となる取材の自由さの重要性であった。前者については、第三巻第四号（大正八年十月）の「綴方の研究と遊戯」に、後者については同五号（大正八年十一月）の「綴方研究（一）」に、それぞれ理論的な発言が掲載されている。

前の発言は、「綴方は対象が対象だけに、学校の科目中でも特に教授上の研究が充分に纒められてゐないやうに思はれる」として、「今の状態では綴方の成績は事実上、偶々正常な定見を備へた教師の個性的感化と、誘導とに信頼する以外に、一般の教授者に取つて

何等の目標も与へられて」いないことを指摘する。三重吉は、月々集まる「二千に近い応募綴方」が「その欠陥を語つて」いると、指摘の根拠を述べ、「子供が任意によこす以外に熱心な先生方から態々纒めて送つて下さるのも随分多数ですが、その中には私どもが見ますと種々の意味に於て非常に導き方が誤つてゐると思はれるものが少くないやう」だと言う。そして、次のように言明している。

私は次号から、さういふ点を概括したり、又は子供の作そのものについての断片的な意見をも公開して、綴方の実質的改善に向つて多少の寄与を計ると同時に、出来るならば教授上の基本的典拠を完成する上の一つの動機を作りたいと考へてをります。ついては第一に「赤い鳥」の読者諸君中の実際上の教育家諸氏から私の意見に対する忌憚なき御非難と、次にはさういふ方々の教授上の御発見や色々の御経験を「赤い鳥」に続々御発表下さることをお願ひ致します。かうしたわれ〳〵の研究が段々と集成されて来れば、或は最後にはわれ〳〵の手で綴方なり進んでは上の程度の作文そのものゝ取扱について或一つの組織的法則を作り試ることが出来ないとも言へません。

「綴方の実質的改善」への多少の寄与をはかり、可能ならば「教授上の基本的典拠」完成の動機、「組織的法則」の試案作成への念願が語られ、特に現場教師への協力を強く訴えているのである。よしんば、「断片的な意見」の公開であろうとも、それは一つの基礎となりうるであろうというのである。このあと、次のことばで結ばれている。

まだ小学校の綴方は教授法も実際の作品そのものも概して比較的整つてゐる方ですが、中学校以上の作文となつたら只単に科目があるばかりで実際は実に乱暴極ることをして眼前を糊塗してをります。これは教師たちの不熱心ばかりでなく作文の教授そのものゝ指導に於て、教育界に何等の組織的権威も立つてゐないのが根本の欠点です。かういふことを考へて来ますとわれ〳〵の断片的研究も、一つの大なる建設に対して非常に意味深い基本の一部分になる訳です。

創刊当初から「作文」「綴方」の混用が三重吉自身にもしきりに見られたが、これにおいて明らかに規定された。すなわち、小学校での「綴方」は「自分の思つてゐることあつたこと見たこと、人に言ひたいことを口で話す代りに、自由に文字で綴るための練習」(第三巻第一号「綴方を読んで」)とかつて述べたように、より基礎的・練習的な性格をもち、その上に立って中等教育以上での「作文」が展開されるという考えである。

応募作品を見て、三重吉は小学生の「綴方」はまだしも、中等学校などの「作文」の現状はひどいという認識をもっているが、この認識はその後もつづいていく。たとえば、翌大正九年の十月号で、その応募時期が夏休み中のため数が少なく、全部で六五二編で、そのうち中学校生一二編、女学校生八四編、高等科男女二〇四編、尋常科児童三五二編と内わけを言い、「この中で一番だめなのは女学校の人の作で、(中略)書き方に厭みだけはないといふのが僅二十一

篇で、あとはみんな、揃ひも揃つて、べた〳〵した下らない飾りをつけたり、空ごとばかりこねくつてかいた、下等なものばかりでした。」また「中学校の生徒の作も（中略）女学校のとは又ちがつた意味で、下等な、こましやくれたものが多かつた」し、高等科のも「きまり切つたことをかいたものや、いやに飾りをつけてかいたものをどん〳〵めくつて行くと、ともかく見られるのが六十二篇しか残りませんでした。」と実状をきびしく述べている。

三重吉の「綴方の研究（一）」が載るのは第三巻第五号（大正八年十一月）であるが、この論文も、「長野県の下村某氏から『私共は常に課題の選択に困つてをります。よい方法はございますか』といふ御質問がまゐりました。」と、その執筆のきっかけを語っている。また、「綴方の研究（二）」（同巻第六号、同年十二月）も、長野県の横山正名氏から送られた「九冊の雑記帳」にもとづいて「形式上の解放と経験の充実」の論を展開し、後半部「日曜日記と演出的叙写」も大阪市の西田董五郎氏の「寄書」に即して自分の考えを書いたものである。

このように、三重吉の綴方理論は主として現場の実践家の発言を契機に、しだいに展開され深化していくことになる。「綴方の研究」（一）（二）の内容についての考察は、翌九年二月以降継続的に執筆される（その三）以下のものとあわせて稿を改めることにする。ここでは、「綴方の研究（二）」の契機となった横山氏の投書をあげておく。

私は「赤い鳥」を最初から愛読してをります。昨年一年間、綴方に対する鈴木先生の御意見に従つて尋常一年の児童を導いて見ました。その結果をお目にかけたいと存じまして中でのよいものを写してお送り申します。いろ〳〵な誤りもそのまゝ書いておきました。一年の間、児童も私も随分本気にやりました。五十人の児童は殆毎日書き、私も毎日それを見ました。序ながら私の学校では、尋常五年以上の女子には、各級ともに、「赤い鳥」を廻覧させてをります。（長野県上高井郡須坂小学校、横山正名）

これが載ったのは第三巻第三号（大正八年九月）で、その三か月後の第六号（十二月）に、送られた資料にもとづく三重吉の論文が発表されるのである。その冒頭で三重吉は「一年生の綴方を抜萃した九冊の雑記帳」について、「これは氏が綴方のいよ〳〵の第一歩から出立した、三十八名の男女生の習作について、いろ〳〵の見地から絶えず、採録して来られたもので、随所に氏の考察と感想とが註記してあります。」と紹介し、「その真実な研究的態度と熱心とには私もかなり感動させられました。氏の研究の断片については一々同感であるばかりでなく、その他のすべての点に於ても、聊の不安定も、乃至かういふ熱心家の一面によく附き纏つてゐるやうな偏執も、極度が持ち来す反感といふやうなものも、更に見出しません。」と、大いに賞賛している。

（兵庫教育大学教授）